

おおつち おおみず

明け雲雀雲居のはてに 雲井のはてのわすられぬ君
虚空 虚空を翔け行く鳥の如く 蝶ただよる虚空か

な 虚空を家と まろき虚空を抱き上ぐる

太虚 太虚より蝶落ちにおつ 秋の雲太虚の風に 無

言に充てる太虚かな 風太虚に息みぬれば

空しき空 むなしき空に満ちぬらし

【大地】 大地の人離野 陰気に閉す大地の私語

大地 大地の静かさふせる しづかにゆれる大地かな

大地鎮めて 大地はまろぶ 大地を怒り這ふ

大陸 大陸の黄塵を鹵に 白い森林を大陸に見む

極地 極地の海に堅く封じて

凍土 凍土をゆく下駄の音 凍土に花の咲かずと

ツンドラ 凍土 あたりは海のやうな苔土帯

【大通り】 ひとすぢ貫ける大通り キネマはてたる大

通り 大通りまだしのゝめの

大道 大道に人がけ絶えて 森に入る白き大道

広小路 広小路に人ちらかつて 薬の売る広小路 灯

点る頃の広小路 広小路花見がへりに

【大魚】 海岸に大魚かなしや 大魚の長尾 大魚つる

波の穂に大魚浮きつゝ 大魚よし

秋出水 あけてくる夜や秋出水 ふりくる雨や秋出水

蟹の碧秋の出水の 門前の秋の出水や 秋出水高く残り

出水 蕨萌え出水落つる 森の中に出水押し行く 出

水を渉る鼠かな ノアの世の出水もかくや

出水川 うねり流るゝ出水川 出水川とどろく雲の

春雨の出水の川に 洪水川

【大晦日】 届く鯛あり大晦日 大三十日愚なり

大晦日 闇のしづまる大晦日 大晦日も独り

大年 棚に火ともす大年の夜 大年は念仏となふる

小晦日 年の大晦日 年や行けん小晦日

年送る 年送る鐘なりいでぬ 年送る大焚火とは

除夜 除夜の御明し春に入り 除夜眠れぬ 除夜の暈

拭くや 蠟涙の冷えゆく除夜の

除夜の鐘 除夜の鐘鳴りはじめ 百八つの鐘のひびきに

鐘数へつゝつか寝て 北のはたての除夜の鐘

【大らか】 またおほらかにわかき芽をふく

大どか 降り舞ふ雪のおほどかに おほどかに睡り入

るとき おほどかにひびき おほどかに杯 取れば

寛闊 馬上の寛闊に 長羽織着て寛闊の 南天

から来る寛闊な風が

おおみそか おき

大魚 大魚の行き来かな 大魚の骨を海が引く 明易

き水に大魚の 秋浜に描きし大魚へ

鰭の広物 大鰭の広い魚 鰭の広もの狭ものらのごと 市にあ

きなふはたのひろもの

【大波】 鰯網を越す大浪の 大波のうねりもやみぬ

大波のうねりも去りぬ そゝり立つ波の大鋸

怒濤 怒濤あびしか梧桐林 十五夜の怒濤へ 春月を

濡らす怒濤や 怒濤を前に粉ならす

波濤 波濤の花を咲かせたり 遠どほし千里の波濤

土用波 土用の頃 わきたちかへる土用浪 土用波はるかに

高し 土用波地ひびき ゆがみゆく顔土用波

【大降り】 青葉の大降りとなる 花じやがいのもの大ぶ

りの雨 暁ごうごうの雨被る刻

豪雨 豪雨底なく湛へけり 十五夜の豪雨しぶくや

夜半の豪雨に鳴きすめり よべの豪雨に焚かれぬ竈や

大雨 夏野くつがへる大雨かな 大雨のなかを啼くがわ

びしき 大雨に追はれ走るなり 大雨来らず

沛然 沛然と雨ふれば地に 沛然たる大気と

【大水】 洪水 高き光の洪水に 我がたましひは洪水に浮

く 洪水引きし師の家の道に

【丘】 あを草の丘の一尾に 秋はきいろい丘 空をかき

り丘なす畑 青き丘浮べることく 夕照る岡に

岡辺 霧はれし丘をゆきて この丘辺を過ぐる葬列

をかのへの をかへの萩に

片岡 片方が傾斜 片岡の槐にあかり 片岡の萩や

丘陵 丘陵の芒見ゆるに 丘陵の冬の林を

野草の丘 野つかさの一本榎 野つかさに今は鳴くらむ

【小川】 小川飛こす 小川に映る 小川のさやぎ 日

のぬきき小川のふちの 小川に流す笹舟の

いささ水 萩のしたゆくいささ水 垣根を繞るいささ水

細水 細水のぼる目高かな 谷の細水洩りぞくる 垂

るほそ水に瓶をおき 細水になくや瘦蛙

いさら川 ふもとゆくいさら川水 いさら川流るゝ道に

小流 小流や微風もありて 小流をうねりうねりて

田の小流に芹洗ふ 水銀いろの小流れは 小さき流に

細流 色をも流せせゝら小川に せせらぎの耳に立つ夜

や 雨のふる日はせせらぎなしぬ

野川 野原の小川 春の海近しと野川 ふたすちの野川の水は

野川の水こもたつるなり

【沖】 灘の深沖に 沖の火のみえずなりたる 沖ゆく